

この頃。

久留里城には実堯の嫡男・権七郎義堯があつて、父の教えに従い、領民を慈しみ家来を愛し、そして己を律する暮らしをしていた。

正室である長野信濃守憲業の娘・房との間には、まだ子が無い。遅れて迎えた側室・亀（土岐為頼の娘）との間には男子がある。義堯は誰の腹であるかと、すべての子の母は正室であるべしという、実堯からの教えに従っていた。それが筋道である、分別というものだ。

その三歳になる嫡子・太郎。

いまが可愛い盛りだが、その甘い顔は決して家臣にはみせなかった。

「兄上、将監殿が参られました」

義堯の弟・横小路図書助堯重が声を掛けた。

「ん、会おう」

勝将監眞勝は真里谷氏臣下でありながら、客分として久留里城下の宝泉院に座していた。いわば真里谷側の外交官という役割である。

「権七郎殿、里見からは、あまり芳しい話を聞かぬな」

「杞憂に過ぎませぬ、将監殿」

「なにかありましたら、ぜひ御助勢を」

「お気持ちだけ頂戴しましょう」

義堯は里見家で生じている内情を、このときまだ知らない。

大永年間は八年目の八月二〇日、西暦でいう一五二八年に改元された。新しい年号は〈享禄〉という。

この享禄年間に、里見氏は大きく家中が割れていった。その理由は、当主である義豊が奉行衆に内緒で古河公方勢力と接触したことが発端である。

享禄二年（一五二九）六月、里見義豊は鶴谷八幡宮の修繕を行った。  
このときの棟札に

源朝臣晴氏武運長久  
大檀那副帥源義豊

と記したのである。

小弓公方の配下にいる者が、よりによって敵対する古河公方の武運長久を祈念することなど「あつてはならぬことですぞ」

奉行衆を代表して実堯がそれを非難した。実はこの竣工祈願に、実堯たちは招かれていなかった。すべて御傍衆の采配で行われたのである。「里見の当主は儂です。叔父上、少し慎んでは貰えませぬか？」

「諫めることは忠義の第一である。耳を傾けるのも当主の器量」

「もう聞き飽いたのです。ここいらで、もう勘弁願いたい。儂は、儂の思つままの里見を作りたのです。煩い小舅は、もう必要ありません。どうぞ久留里へ御帰りください」

「……殿！」

実堯は絶句した。

義豊は、すみやかなる〈二統〉を推し進めるつもりと悟った。

「殿はなぜ〈二統〉に拘るのです」

「だまれ」

「里見家がどうこうではないのです。世が早すぎる、そのことを思えばこそ……」

「だまれと云っている！」

義豊は激昂し、傍らの湯飲みを実堯に叩きつけた。長年の鬱憤を吐き出した義豊の瞳は、赤く血走っていた。

稲村城から奉行衆を追い出した義豊は、久留里への帰城を一旦は口にしながら、実堯の身柄を宮本城に留め置き、御傍衆を送り込んで監視させた。

「殿に申し伝えよ。こんなことをしていたら、真里谷に付け入られるぞ」

実堯の叫びは、遂に義豊に届くことはなかった。御傍衆は義豊に依ること、いつかは権力を握ろうと夢見ていた輩ばかりである。在地豪族である彼らは、本気で〈二統〉に理解はしていない。ただ、陽の目をみる機会が巡ってきたことだけに高揚した。

ただひとり、中里備中入道正端だけが、この  
ようなやり方が

「何も生まぬ」

ことだけを諫言した。が、義豊は聞く耳すら持  
とうとしなかった。

+++++

相剋のはじまり(3)

夢酔 藤山